

# 名古屋の古道・街道

池田 誠一

## 【21】 知多街道…笠寺から大高へ

### 1 海から川に

古代、名古屋の東南部にあった鳴海潟はいつ頃天白川になったのでしょうか。信長は桶狭間の戦いの時には潮の具合を見て鳴海に直行せず少し北を回ったといえます。その頃はまだ完全には陸地化していなかったようです。関が原の戦いの後東海道が設定された時もやはり少し北に迂回しています。こうしてみると名古屋方面から知多方面に直行できるようになるのは江戸時代に入ってからと考えられます。



図1 名古屋東南部の昔と知多への道

干潟が川になって流路が一定になると渡りやすくなります。江戸時代になって、笠寺台地の裾から信長が造ったという堤を通り、幅の狭くなった天白川と扇川を渡って知多半島に向かう道が出来ました。これまでのように、いったん東海道を鳴海宿に出て常滑街道を進むのに較べて、この道も3角形の2辺を1辺で済ませることのできる道でした。こうして出来た道が今回紹介する「知多街道」です。(図1)

### 2 知多半島への新しい近道 …知多街道

#### (1) 知多郡道

名古屋と知多半島を結ぶ道については以前に紹介した常滑街道があります。これは東海道の鳴海宿から西に知多半島の西側、常滑に向かう道でした。これに対して今回の知多街道は、新たに陸地化した部分を通して名古屋と半島とを結ぶ近道です。

江戸後期に描かれた尾張名所図会には、笠寺の図の中で、南に伸びる道を「知多郡道」と紹介しています。(図2) これは「知多・郡道」と読むのではなく「知多郡・道」と読み、知多郡への道ということでしょう。

明治になって郡道が定められた時にはこの道

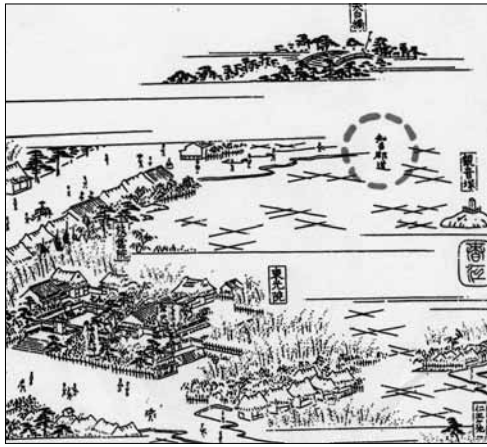


図2 尾張名所図絵にある「知多郡道」(○印)

は「郡道・大高街道」とされたようです。江戸時代から明治時代にかけて、名古屋と知多半島を結ぶ近道として様々な人に歩かれてきたと考えられます。

## (2) 知多街道

知多街道は笠寺観音の少し東で東海道から分かれます。南西に台地の東の裾を星崎に向かい、星崎からは南に向きを変え、鳴尾から天白川、扇川を渡ります。そして土手を下って鳴海の西のはずれにある善の輪(昔は善之庵)に入り、その西側、大高との境目近くで鳴海から来る常滑街道に合流しました。(図3)



図3 明治中ごろの知多街道

## 3 笠寺から大高へ

それでは知多街道を歩いてみましょう。短いので全区間歩けそうです。出発は笠寺観音の東の一里塚です。(市バス「赤坪」停留所の東、約200m)

笠寺の一里塚は片側になってしまいましたが、名古屋市内に唯一残ったもので、見事な榎に育っています。その一里塚を100m程東に行った、東海道が少しカーブする所に南に入る道があります。ここが知多街道の入口です。右手の自転車屋の横にはイボ地蔵と呼ばれる小さなお堂が



笠寺の一里塚と旧東海道(左)

あります。

入ってすぐ道は3つに分かれます。細い左手の道に惹かれますが街道はその右の道になります。ただこの道も旧道は少し進んでから左手の住宅地の中に消えます。街道は区画整理された住宅地の中を斜めに進み、再び道として現れるのは1\*ほど先の本城公園を出た所になります。

そこに行く前、広い道に出る手前で右からの斜めの道と合流しますが、その道を100mほど行くと粕畑貝塚の遺跡があります。名古屋で最も古いとされる7000年前の縄文早期の遺跡です。この辺りは鳴海潟を東南に見下ろす台地だったようですが、原型は大きく改変されて今は榎の大樹と千手観音等がまつられています。ここは笠寺(笠



粕畑貝塚



星崎小にある星崎城址石碑



石神社と阿原堤(道路が盛り上げる)

名鉄の線路になりますが、その手前を右に行く道が知多街道になります。

\*

覆葺)の前身の小松寺(観音塚)があった所だともされています。本城公園には右手の信号を渡って南に進み、中井用水の緑道に出て右に行きます。

ここで少し回り道になりますが右手の丘に星崎の史跡を見ておきましょう。公園の北の道を西に、名鉄の踏切を渡って坂を上ると右手に笠寺小学校があります。ここは戦国時代の星崎城の跡とされ、手前の校門への階段を上ると右手にその石碑があります。道路をまっすぐ西に坂を下ると細い道と交差します。この道は以前紹介した塩付街道の始点の近くで、左に曲がりこむと星崎の星宮社の前に出ます。

星宮社は7世紀にこの地に星が降ってきたことに由来するとあり、本殿裏の上段には氷上姉子神社と同じ乎止与命を奉る上知我麻神社、下知我麻神社があります。神社を出て左に行くと

街道は名鉄の線に並行して南に進み、少し行った名鉄の本星崎駅の所で「く」の字に曲がりまた南に進みます。星崎から南に続く道は始めにも述べた信長が作ったという阿原堤といわれているもので、道が盛り上がっているのがわかります。駅からすぐ左には石神社があり、通を渡って少し行った右には光照寺があります。ここには道に面してお堂があり100体ほどの石像等が収められています。また同寺の中には大曾根を本拠にしていた山田重忠の碑があります。道は国道1号を斜めに渡って、延長上を進みます。

星崎の地名は笠寺台地の先端に付けられた名前ですが、その沖が陸地化するとともにどんどん広がりました。岬の南が本星崎、その南に星崎があります。(さらに2\*ほど西の新田も星崎です。)この辺りから西南の1帯は信長の堤によって守られて陸地化が進み、塩田開発の基地にもなりました。細い路地が残る寺社も多く迷路を歩くような楽しさがあります。

街道は国道から右に外れますが、すぐ道から外れて国道に戻り鳴尾町の信号から南の細い道に入ります。少し行くと右に西来寺が見えます。鳴尾は江戸時代、牛毛・荒井村といい大きな塩問屋がありました。中でも永井家はこの辺りの塩を仕切り、塩付街道もその家の前が起点だったといいます。永井家は三河大浜出の大名永井直勝の系列で、始め三代は久衛門を名乗ったので塩付街道は久衛門街道とも呼ばれたそうです。永井家は永井荷風や高見順を出した家柄で、その菩提寺の西来寺には荷風の追悼の碑が建てられています。また永井家の跡は寺の西の駐車場のところで、北側に8代星渚の碑があります。



3段になっている星宮社



永井家のあったあたり(塩付街道の起点とも)



西来寺にある永井荷風の追悼碑

街道に戻ると直ぐ上り坂になり天白川の堤防に出ます。対岸には鷺津砦の山並みが見渡せます。

\*

左の大慶橋に迂回して川を渡り、堤防を西に行きます。少し行って左に下っていくのが街道です。これから先、昔は一面の水田でした。道なりに行き、広い道路を左の信号に迂回して進むと、急に道が細くなって旧道らしくなります。右に曲がると善之輪の集落に入ります。集落の中の少し街道の面影を残した道を進むと終点の常滑街道に飛び出します。右に常滑街道を取ればすぐJR線で、左は大高駅、真直ぐ進めば大高を経て名和へと続きます。



知多街道と常滑街道の合流点



図4 知多への道の変遷

## 4 近道の宿命

近道として出来た道は、その上を行く近道が出来た時、意味を失います。

江戸時代に笠寺台地の西で行われた新田開発は塩田の沖に干拓地を作り、陸地を広げられました。南区のJR東海道線の西はほぼその干拓で出来た土地です。土地が出来ると道が出来ます。新田から新田へ。工事する人に始まり作物を作る人。そこで商いをする人も通りました。そして熱田から順に南に伸びた道の先の天白川に、明治30年橋が架かりました。千鳥橋です。この道路によって名古屋と知多半島は最短距離で結ばれることになったのです。(図4)

最初は新田の堤防を伝う曲がった道でしたが改良が加えられ、県道から国道へと変わりました。そして今では幅員50m、真っ直な国道247号になりました。江戸から明治と近道として歩かれてきた知多街道はその名も譲り渡して静かな道になりましたが、ここで紹介したような史跡が道の過去を物語っています。

渡し跡 姿変われど 赤トンボ

〈主な参考文献〉

- ①池田陸介・桜井克郎「南区歴史探訪」(1986、B. Sマイタウン)
- ②大野一英「名古屋の駅の物語(上)」(1980、中日新聞本社)